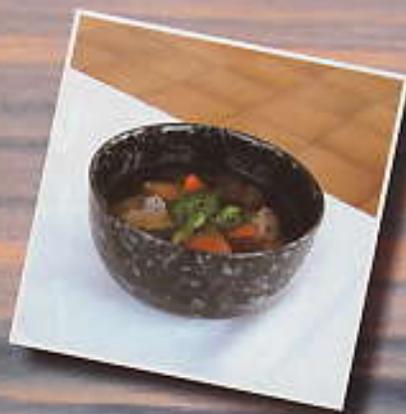




特産品「いわし」を活かし、
町に元気を呼ぶ女性たち

千葉県九十九里町・九十九里町商工会女性部



千葉県九十九里町は、いわしとともに栄え、いわしに支えられた町。沖を通る黒潮がいわしの繁殖に適し、江戸時代から、いわし漁、いわしの水産加工が、町の主要産業となっている。

この九十九里町の中央公民館ホールで「第二回わが家の味自慢 いわし団子汁コンテスト」が開かれた。「油揚げのなかにいわし団子を詰めたもの」「ロールキャベツで包んだもの」「豆乳をスープに使ったもの」「普通の二、三倍の大きさを持つジャンボ団子」「中華風」などなど、昔風、現代風、オリジナルと趣向を凝らした団子汁が並んだ。出品者は、地元婦人会、個人、飲食店に加え、近くの東金市、大原町などからも応募があり、その数は二十七になった。

審査するのは、地元の人たちはもとより、テレビやラジオでこのコンテストを聞きつけた都内や埼玉県から足を運んだ約三百人の来場者たち。ズラリと並んだ大小の鍋の団子汁を味見してまわる。そして、最も良かったと思う団子汁に一票を投ずる。少量ずつとはいえ、二十七の鍋をすべて試食するのは不可能といってもよいのだが、なかには、気に入った団子汁をお代わりする人もいる。

このコンクールを主催したのが、九十九里町商工会女性部。女性部長の櫻井憲子さんは振り返る。「これまで女性部の活動といえば、道路脇の花植え、老人ホームの慰問といったボランティア活動が中心。



イベントに参加といっても、他の団体が主催するものに、お手伝い役として参加する程度だった」と。しかし、現実には、廃業に追い込まれる商店も出てくる。町、商店街の活性化に向けて「何とかしなくちゃ」と思案をめぐらせていたときに思いついたのが、「いわしの町 九十九里町」をアピールするためのこのコンテスト。第一回は、平成十五年九月に開かれた。このときの出品数は、今回とほぼ同数の二十六。ただ、審査は、町長などの来賓数名が、「味」「見た目」などの項目を五段階評価する方式だった。今回は、お客さんたちにも審査員になってもらう方式に改めた。今年、一番得票が多かったのが、「海の寮」で出されているジャンボ団子だった。他にも議長賞、町食生活改善推進協議会会長賞、商工会会長賞など出品者全員がなんらかの賞を受けた。副賞は、同商工会で買える商品券など。

第一回から二年半が経過して今回の第二回が開催となったのは、町のシンボル「いわし博物館」が平成十六年九月に爆発を起し、死者をも出す痛ましい事故が起こったからである。女性部では、第二回の開催に向け、準備を進めていた矢先、この事故で、コンテストを中止せざるを得なかった。

しかし、女性部の面々はめげなかった。会場を隣の中央公民館に移し計画を練り直した。町役場には、町長賞の提供やホームページへの掲載などを依頼した。町の企業にも協賛を得るために走り回った。同

九十九里町の『いわし団子汁』の歴史について
講師 齊藤功氏

町にある国民宿舎「サンライト九十九里」には、宿泊券の提供も受けた。

櫻井さんは「もちろん、いろいろ団体の協力を得たけれども、女性部が単独して開催した」ことに誇りを感じているという。

この日は、郷土史家で地元の九十九里高等学校の齋藤功先生が「九十九里町いわし団子汁の歴史」と題した講演も行なった。このなかで、いわしの語源は「賤しい魚」とされているが、平安時代の貴族の間でも食べられていたという。齋藤さんは「賤しい魚」から「癒しの魚」への転換を強調した。そして、いわし団子汁は、鳥取県、兵庫県、石川県などで、それぞれ地域独特の発展を遂げているとも指摘した。第三回のコンテストでは、このような県外の団子汁も出品し、「いわし博物館」に変わる同町の名物になることを期待したい。

■連絡先 二八三・〇一〇四

千葉県九十九里町片貝六九二八・三三〇
九十九里町商工会女性部
〇四七五・七六一四一六五

